



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第25号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2008年3月11日
 〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
 Phone 0561-62-4111 EX 2498
 FAX 0561-63-9308
 E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第25号ニュースレターの目次

○ 第18回定例セミナー報告／学生感想文	1
○ 第19回定例セミナー報告／学生感想文	3
○ 「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 開催	5
○ 研究紹介―「社会福祉とジェンダーの視点」	6
○ ジェンダーとコミュニケーション	7
○ 2008年度前期ジェンダー関連授業紹介	8

2007年9月20日（星が丘）に、第18回定例セミナー「キャリア・デザインとジェンダー」を、そして10月24日（長久手）には、第19回定例セミナー「“わたし”が“あなた”だったら…取材で日々思うこと」を開催いたしました。以下はその概要です。

第18回
定例
セミナー

講師 宗方 比佐子さん（金城学院大学人間科学部心理学科教授）

キャリア・デザインとジェンダー



大学教育の現場において“将来の進路がイメージできない、分からない”“自分の適性が分からない”といったキャリアに関する悩みと不安が増加しつつある。こうしたことが近時の大学新卒者の離職率の高さにも現れているように思われる。一方で社会統計学的データが示すように、男女共同参画基本法施行後も職業人を取り巻く環境に「ジェンダー格差」「ジェンダー・ステレオタイプ」が存在し、それが個人の可能性や能力開花を妨げる一因となっていることは否めない。こうした状況の中で、旧来の固定的で画一的なジェンダー・ステレオタイプにとらわれず、個人がそれぞれに『自分らしいキャリア・デザイン』を実現する鍵とは何かを学生が考える機会を設けることを主目的として、本講演会は企画された。

演者の金城学院大学人間科学部教授・宗方比佐子先生は「女性のキャリア発達」「職場のハラスメント」「大学生の職業選択」等の学術研究に従事されてきた『キャ

リア心理学』の第一人者である。また「キャリア発達」「キャリア開発」に関する教育実践にも尽力され、『個重視・女性のためのキャリア開発サポート』が文科省現代GPに採択されたことは記憶に新しい。以下、同講演会の内容を報告する。

キャリアとは単に経歴、履歴、職域的専門性を指示するのみならず、現在は「生き方そのもの」を表すものと捉えるようになってきており、「ワークキャリア（仕事に関わる経験の連続体）」と「ライフキャリア（人生に関わる経験の連続体）」として概念的定義がなされている。こうした「キャリア」をめぐる 이슈が現在脚光を浴びるようになった背景として、ワーク・スタイル、ライフ・スタイルの急激な変化により、『自律的なキャリア開発』が求められるようになったことが挙げられる。すなわちキャリアの選択肢の拡大と競争の激化、受動的なキャリア・デザインから能動的なキャリア・デザインへのシフト、そして将来の不確実

性の増加により、個人にキャリアに対する根本的認識の変容、及びそれに随伴した行動変容が促されているのである。

それでは上述の状況の中で、自分自身らしいキャリアを具現化していくために必要な要素とは何であろうか？まず基本前提として、キャリア・デザインとは他者との社会的比較により相対的に定義されるだけでなく、“自分らしく生きられているか否か”という主観的評価（主観的キャリア）によっても規定されるという認識に立つことが求められる。すなわちキャリア・デザインとは、人生における自己表現であるがゆえ、自分らしい独自のキャリアを模索することが最も重要とされるのである。

また「キャリア発達」において、キャリアを模索、探索し、キャリア選択を行うことは青年期における重要な課題であるが、それは就職後の「キャリア試行期」以降においても形を変えて継続していく。すなわち『キャリア・アンカー理論』が示す通り、就職後5年～10年の初期キャリアの臨界期に“自分が本当に行いたいこと”“自分の能力がよりよく発揮できる部分”を自己覚知し、それを自ら向上させていくことがその後のキャリアを大きく方向づけるとされている。

また会の後半では理想を現実にするキャリア実践の個別・具体的方法を示すため、キャリア心理学の最新理論が紹介された。例えば『積極的不確実性理論』では、“未来”は予測不可能という前提の下、むしろそれは“個人が自らポジティブかつアクティブに創造し、開発していくものである”ことを主張している。また『計画された偶然性理論』では、流動的変化が激しく、先の見通しのつかない状況において、“予期せぬライフイベントがキャリアの機会に結びつく”こともあり、常に“様々なことに興味をもち、学習意欲や探究心を生涯に渡って持ち続けること”の有用性を示唆している。更に Ibarra (2003) は、キャリアをポジティブに変化させる方略として、“まずは行動し、考えていく”

という、「試行錯誤」の重要性を強調している。

これらの理論を踏まえた上で、最後に宗方先生は、キャリアの主人公とは“自分自身”に他ならず、「自分自身が納得できる人生を歩むことが重要であり、キャリアの選択には様々な形態や理由があって構わない」「仮に将来の進路がイメージできない人は、頭で考えているだけでなく、行動しながらキャリアを開拓していくことが有用である」、そして「キャリアがすぐに実を結ばなくとも大丈夫であり、躓いたり、転んだり、寄り道をしたり、たくさんの失敗しながら、自分ならではの素晴らしい人生を創造することこそが重要である」ことを述べられた。

講演会を傾聴して、キャリア・デザインとライフ・デザインは“同根”であり、それをどのように方向づけるのはまさに“当事者自身”に繋がっているという印象を受けた。終身雇用制の崩壊、雇用形態の構造的変化等から鑑みて、今後実社会に旅立つ大学生、そして女性を待ち受ける職場環境は決して楽観視できるものでないが、そのような環境要因とは独立して「個人が確たるキャリア・イメージとキャリア・デザインを持ち続け」「失敗を繰り返しながらもポジティブに進んでいくことが、自分の生存、生活、人生の質を高めていく」ことを本講演は指摘していたように思われる。筆者にとって「決して順調なキャリアを歩んできたとは言い難い私だからこそ話せるキャリア論がある」という宗方先生のご講演は非常に説得力を持つものであったし、「失敗しても自分のあるべき姿を見失わず、前へ進んでいけば大丈夫である」という先生のご主意には大いに共感、感銘を受けた。将来の進路に対して不安や悩みを抱える、あるいはこれから将来の進路を本格的に模索しようとする学生にとって、本講演会はキャリア・デザインの基本的視座を与えるのみならず、学生に「勇気」と「希望」を与える極めて“ポジティブな内容”であり、大いに示唆に富むものであった。

(文責 IGWS運営委員 西 和久)



学生感想文

長谷川直之

現在、女性の地位は上昇し、ビジネスの最前線で活躍している女性も少なくありません。しかし、現実には依然として性別による差は存在しています。

宗方先生は、電車の中で女性が必死に子どもの世話をしているのに、男性が何もしていなかった光景に腹を立てたと話されましたが、実は私はこの状況に違和感を感じませんでした。私の家庭は亭主関白そのものであって、父親が家事をしている姿は見たことがないためです。ただ、そんな私でも、どうして女性が男性に手伝って欲しいと言葉をかけなかったのかが引っかかりました。

人間苦しいときなどには他人の力を借りたくなります。それでも手助けを求めなかったのは、男性は育児に関与すべきでないということ、女性もまた「正しい」と思っているからなのではないでしょうか。まだ

まだ、男女の役割分業というものに考えが支配されていることを、この事例から考えさせられました。

今回の講演「キャリア・デザインとジェンダー」では、人生のキャリアを考えることの重要性を知りました。人生設計で自分の中にバリアを作らないことは、ジェンダーへのバリアを作らないことでもあると感じました。

「亭主関白」な家庭で育ってきた私ですが、家事は女性がするものとは思っていません。宗方先生が示されたように、家事に費やす時間には男女にまだ大きな開きがありますが、これはいつの日か解消されるものと信じています。今回の講演は私にとって、ジェンダーを再び意識する良い機会になりました。

(本学文化創造学部3年)

第19回
定例
セミナー

講師 大脇三千代さん(中京テレビディレクター)

“わたし”が“あなた”だったら… 取材で日々思うこと



大学生活での東南アジア研究からの出発

中京テレビで記者、ディレクター、プロデューサーとして第一線で活躍している大脇三千代さんを迎えて、ディレクターという仕事につくまでの歩み、またその日々の取材の現実などについてお話を聞いた。大脇さんは、2004年には女性放送批評懇談会による放送ウーマン賞、さらに2006年には文化庁芸術選奨新人賞も受賞している。近年の日本社会の問題を鋭く切り込んだ産婦人科医師不足の実態を東海地区の病院の取材からドキュメントしたテレビプログラムは深刻な産婦人科医師の不足の状況下でも若手産婦人科医師が孤軍奮闘している姿を紹介し、温かい印象を与えるものだった。

ここではそのお話の印象に残った部分を数点紹介したい。大脇さんが大学生のころに東南アジアと日本の関係を研究し、それらの国々と交流するゼミに所属していたことが契機となり、卒業後18年間にわたってドキュメント作成に携わってきた。自分一人のできる仕事ではなく多くの周囲の理解と支援があってこそ続

けられる仕事だと思う。いくつかのドキュメントを日比の両親を持つ子どもに焦点を絞っている。

フィリピン女性が日本に出稼ぎに来ている間に日本男性と出会い、子どもをもうける。その子どもは父を慕い、会いたいと願っているにもかかわらず、日本人父は子どもを振り返らない。日比の間にある日本人の差別意識が子どもから父を奪ってしまう。またフィリピン女性で日本で働く人々の多くが、超過滞在であり、そのことが警察などにバレることをおそれつつ、隠れながら生活している。彼女たちへインタビューを続けるうちに生活に追われつつも拒否せず対応してくれる人々と心通う体験もした。またいわゆる「従軍慰安婦」～戦時性奴隷～問題もとりあげている。50年以上前インドネシアへ進軍した日本兵によって性的奴隷とされた体験を語る老女たちをカメラで追った。放映されたときは視聴者からは嫌がらせの電話、手紙などがきて「インタビューはヤラセである」、あるいは「再放映したらディレクターは切腹せよ」などの声が放送局に届いた。

報道記者であることの意味を自問

報道記者であることの意味を自問した時期もあった。現場でNGOとして活動した方が社会に貢献できるのではないかと真剣に悩み、NGOメンバーになろうとしたこともあった。報道することの意味、報道できる立場にいることの重要性を周囲の人から知らされ、報道記者という職業を継続している。報道とはその作り手の五感を通じて現実を再構築する仕事である。伝える側、伝えられる側の関係性が重要であり、その関係性を通じて現実を再構築する。自分の思い込みのみでは視聴者に何も伝わらない。現在、中京テレビの局内には表立った女性差別というのはないが、これも先輩女性たちが努力して女性の地位を開拓してくれてお蔭と感じている。

70分ほどの講演と一部作成ビデオの紹介をしたあと、自由な質疑応答の時間があった。授業のある平日の夕方ということで、参加者は問題意識を明確にもった学生、一般市民であった。参加学生から「自分も卒業後ジャーナリズムの世界で働きたい」「ドキュメントをする材料をどのように見つけるのか」など鋭い質問が多くでてきた。

プロ意識とは

学生からの質問で「テレビ・ディレクターとしてプ

ロ意識はどのようにもっているか」という質問に対して大脇さんはさりげなく「記者としてのプロ意識半分、そしてコミュニティーの一員であるという意識半分です」と答えられたことが印象に残った。

肩をはらずに、しかし国際的な鋭い視点をもったプロの女性ドキュメンタリー作家が地元名古屋にいることは、今後の日本のジャーナリズムにとって貴重なことである。すっかり大脇ファンになって、講演会場を後にした。今後さらに鋭いドキュメンタリー作品を創造・制作されることを期待したい。

(文責 IGWS運営委員 國信潤子)



学生感想文

「取材から見つけられること」

酒井 秀治

3年生の秋になると、「就職セミナーに参加した」「会社説明会に行った」「インターンシップに参加した」という周りからの話が盛んに耳に入るようになり、自分も何かしなければと焦っていました。私が就職先に考えている職種がメディア関連だったので、現場の人の声を聞きたいと思い今回のセミナーに参加しました。

大脇三千代氏の仕事の代表的なものに、東南アジアと日本の関係を取り上げたドキュメンタリーがあります。大脇氏はその中で日本人男性の子どもを1人で育てているアジア女性を追っています。男性は仕事で現地を訪れそこで女性を妊娠させたまま日本へ帰ってしまいます。女性は子どもを産み男性と一緒に暮らそうと連絡を取ろうとしますが、男性は彼女の所へ帰ってくることはありません。子どもが無邪気に成長していく姿から、行き場のない悲しみと怒りが伝わってきました。この番組を見て、同じ日本人男性として大変情

けなく思いました。日本人男性の中にあるアジア女性に対する、外国人であること、女性であることの二重の差別性を感じました。

大脇氏はまた、アジア女性の取材を通じて多くのことに気づかされたと話しています。普通に考えれば、現地の人にとってお金を稼がなければならない大事な仕事を休んでまで取材に応ずるメリットはありません。それでも彼らは大脇氏の取材に喜んで応じてくれるそうです。なぜなら、「一人でも多くの日本人に私たちの現状を知ってほしい」からなのです。中には大変なトラウマを負って、話すことさえ辛い人でさえ、「カメラの向こうにいる日本人に話したい」と言うのだそうです。大脇氏はこうした体験から「自分がしなければならぬ」という使命感や多様な視点の必要性に気づいたと言います。大脇氏はこれを機に自分の取材スタンスをつくっていったようです。私は、こうし

た大脇氏の話から現場の生の声をもつ影響力の大きさのことを学ぶことができました。
 や取材対象に向かう姿勢・スタンスの重要性など多く (本学現代社会学部3年)

2008年1月29日 「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 開催

ジェンダー・女性学研究所の初の試みとして、このたびジェンダーバイアスに意識的な卒論報告会を企画しました。7人の4年生には文学、社会学、メディアの専門領域から卒論研究の概要を発表してもらい、教員や後輩からコメントや質疑が続くなど、ジェンダー視点を共有し合う新たな発見、刺激の場となりました。

報告者 / 卒論タイトル

『Working Women
in the United States.』



『日本女性のM字型就業を
逆U字型に変えるには』



『タイの児童買春問題』



『少子化と日本の労働力—
女性の社会進出の観点』



『Dracula における男性性』



『ヒロインがヒーローになるとき—TBSドラマ「花より男子」
分析をもとに』



茶話会



報告会の後で、茶話会を催しました。
 そこでは、和やかな雰囲気では話が弾みました。



研究紹介

社会福祉とジェンダーの視点

酒井 美和

私が大学生時代のことである。講義の中でも社会福祉専門科目を履修し、実習も経験するにつれ、少しずつ気になることがあった。それは、社会福祉に関係する人々には女性が多いことであった。社会福祉の支援を必要とするクライアント、クライアントを支援するワーカーなど様々な関係者に対して、そのように感じたのである。その思いは、時間が経ると共に、私の中でますます強く感じられるようになっていった。なぜ、これほど社会福祉の領域には女性が多いのだろうか。そして、これほど女性が多く関わっているにも関わらず、どうしてそれが殆ど疑問視されないのか、当然のこととして受け止められているのか。これらが私の中で何度も問われるようになり、私は社会福祉とジェンダーの関係を考えるようになったのである。

大学院生になると、修士論文を通して、社会福祉に女性が多い要因が幾つか見えてきた。その一つとして、社会福祉と貧困の結びつきが挙げられる。社会福祉の実践は、歴史的に慈善組織化協会での友愛訪問に代表されるような慈善活動として始まった。友愛訪問では宗教的背景を基盤に、多くのクリスチャンたちが貧困の救済を目的として活動を行っていった。ボランティアで訪問員たちが貧困家庭を訪れ、各家庭を支援していったのである。そして、この友愛訪問を行った訪問員の約8割が女性であった。つまり、社会福祉実践は女性たちによって始められ、発生当初から女性が多く関わる領域だったと言える。

しかし、ここで疑問が一つ残る。友愛訪問が行われた19世紀後半から20世紀初頭の欧米において、女性は家庭を守る存在であると捉えられており、家庭を蔑ろにする女性は軽蔑の対象であった。つまり、家庭外における社会的な活動は女性にとって行いにくかったと言える。それにも関わらず、なぜ多くの女性が慈善活動に参加できたのだろうか。これを考える時に、宗教的背景だけでなく、ジェンダーを考慮する必要がある。家庭を守るべき女性が社会的に活動するためには、社会に認められた活動である必要があった。社会で認められた女性の活動とは、女性が行う役割として“自然”であると考えられたものであり、いわゆる女性らしさが基礎とされた。“本来から優しく感受性の

高い面倒見のよい女性”が“家庭や子どもの事柄に関わっていく”活動であるならば、自己の家庭を維持する限りにおいて受け入れられたのである。よって、その活動内容が女性の参加を社会的に容認させ、家庭外における活動を行いやすくさせたと考えられる。現在でも、社会福祉の実践者として女性が高い割合を占めている流れは変わらず、厚生労働省の社会福祉施設調査報告書（2006年）を見てみても、社会福祉施設で働く人の75%は女性となっている。

貧困と社会福祉の関係における女性の高い割合は、サービスを受けるクライアントの側面でも同様である。女性が多い背景としては、女性は貧困に陥りやすいことが挙げられる。近年では、離婚率の上昇と共に経済面において困難に直面する女性が増加している。女性の経済的基盤は男性より弱く、平成18年の賃金構造基本統計調査（厚生労働省）によると、男性の平均年収555万円に対し、女性は343万円となっており212万円ほど低くなっている。雇用形態を見ても非正規雇用者の約7割が女性であり、賃金が低く不安定な職業に就いていることが分かる。従って、女性が貧困に陥りやすいのは当然の流れであると言える。

以上のことから、貧困という社会福祉における一領域を見ただけでも、なぜ社会福祉において女性が多いのか、その要因がジェンダーと関連して幾つか浮かび上がってくる。つまり、社会福祉とジェンダーは今までは、その関係性が殆ど取り上げられてこなかったが、その根本において結びつきがあったと言える。このような社会福祉とジェンダーの関係に注目し、ジェンダーの視点で社会福祉を問い直そうとする研究活動は、1980年代に欧米において始まり、日本では1990年代になって取り入れようとする動きが始まった。ジェンダーの視点は、社会福祉における高齢や児童、障害など様々な領域で活かせるものであり、また必要とされているものである。私は、今後も社会福祉とジェンダーの関係に注目し、ジェンダー視点で社会福祉を見ていきたいと考えている。

(本学医療福祉学部助教)

ジェンダーとコミュニケーション

太田 浩司



性は大きな社会的なしるし（マーカー）である。我が家では娘二人と妻が「女の子チーム」と言っていて私を仲間に入れてくれないことがある。私が女性特有の言い回しを使用して仲間に入ろうとすると「それは女の子の言葉だよ」と言われる。生まれた瞬間から「男の子でした」、「女の子でした」と言われ、服の色から何からすべて区別をされるので差別を意識せざるを得ないのだろう。社会の力はすごい。

メディアに目を向けると、若い男性向けの雑誌には筋肉質で長身でこそ男性だと言わんばかりの広告が目にとまる。「筋肉留学」などする男性タレントもいるようだ。女性雑誌には「豊胸」、「かわいい」や「男の子にもてるための」という文字が目立つ。地下鉄の中では懸命に化粧をする女性も見え、また特に夏には体型を強調するような服を着用している女性もかなり見受けられる。

ところが、最近の男女の言語や非言語の行動には興味深いものが多々ある。今の時代、男性が化粧をしたり、ピアス、指輪をつけることは珍しいことではない。髪の毛も比較的長い。中にはヘアピンで髪をとめている若者もいる。6月に来校したアメリカからの先生に「何で女の子みたいな格好をしているの?」と尋ねられた。明確な回答はできなかった。極端な例ではあろうが、テレビを見ていると男子高校生の希望者に女装を体験させる番組もある。面白いことにオーディエンスは女性がほとんどである。一方、女性は、特に同性間で話している時に「すごい」、「そんなことしねーよ」、「腹減った」などという言葉を使っていることを目にする。地面にあぐらをかいて座っている姿や、大きな口を開けて笑い、大きなビールジョッキを豪快に飲み干す光景も別に珍しくなくなった。

さて、これらの一見矛盾するような人々の行動は説明する必要があるだろう（と思うのは学者だけか）。私が研究の際に頻繁に使用する社会的アイデンティティ理論によると、人間は自らの所属グループに対する帰属意識、つまり社会的アイデンティティが独特でありかつ肯定的な意味を保つことができるように行動する傾向がある。とすると、体を鍛えて筋肉質になれという男性への広告や、かわいさなどを強調する女性雑誌の広告、さらには化粧や被服行動などの非言語行動は、男性、女性それぞれの社会的アイデンティティを社会的に顕著なものにさせるためのものだと解釈ができる。時代の変化とともに男女の間の距離を矮小化

する動きが顕著になり、それによって「脅威」にさらされつつある男性、女性としてのアイデンティティを、コミュニケーション行動により顕著で肯定的なものとして保持する努力をしているのだろう。一方、男女の間での行動の共有は男性、女性それぞれが現在よりもさらに望ましいアイデンティティを獲得するための努力だとも理解ができる。それぞれの性の行動規範には存在しない行動を取り入れることにより、行動の範疇を広げ、それにより自らの社会的アイデンティティをより豊かなものにしようとしているのだろう。

実に面白い。拮抗する2つの力が同時に働き、社会での男と女の関係を今までになくダイナミックなものにしている。とは言え、そのダイナミズムのために様々な問題が見出され、議論や研究の対象になるのも確かだ。

男女間でどのような距離をとるのが望ましいのかを見極めるのは容易ではない。時と場合、相手との関係など様々な媒介する変数が関与しているため、一言では言うことはかなり難しい。ただこうして様々なコミュニケーション的現象を観察していると、社会的アイデンティティには自分たちを他とは異なる存在であると認めるためになくはならない部分、つまり不可侵な部分が存在するように思える。その一つが、少なくとも現在は、言葉の選択も含めた、コミュニケーションのスタイルであろう。最近の男女間の比較研究でも依然として男女のコミュニケーションのスタイルの違いは認められており、また異性間のコミュニケーションではスピーチコンプリメンタリティという男性は低い声で話し、女性の声は高くなるという現象がしばしば生じると言われている。これがホルモンによるものか、ステレオタイプを内在化しているために生じるのかは今の私にはわからないが、少なくとも現在は、言語が一つの「砦」と言えるのだと思う。

これから社会が変化中、男女間の関係もさらに複雑に変化することだろう。さて、私は我が家でどのようにしたら「女の子チーム」と楽しく生活することができるのだろうか。今後が楽しみでもあり、恐ろしくもある。

(本学現代社会学部教授)

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人でも受講できます) <2008年度前期>

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ビジネスとジェンダーⅠ 長久手
講師 / 國信潤子

【授業の概要】

主に産業社会学の視点からビジネス関係、労働環境におけるジェンダー(社会・文化的性)区分の実態を国内外の男女別統計データなどから検討し、雇用機会均等法、男女共同参画社会基本法などの法制整備によって改善がみられるか、について検討し、事例などを紹介しながら現状を理解し、解決の方向を探る。

ジェンダーと社会 長久手・星が丘
講師 / 中島美幸

【授業の概要】

文学作品を始めとする「表現」を取り上げ、「女」「男」がどのように描かれているか、また、なぜそのように「女」「男」が描かれたのか、社会的・歴史的・心理的視点から考える。また、「表現」された「女」「男」によって、社会や個人がいかに固定的なイメージに縛られているかを認識し、さらに、固着したイメージから自由な、現実の多様な女と男の生と性を「表現」に探る。

女性学・男性学 長久手・星が丘
講師 / 中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

比較文化 長久手
講師 / 星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の文化について触れる機会が多くなってきた。この授業では、文化を考察する上で必要な概念について学ぶことによって、種々の文化の特徴について考える。さらに、異文化交流についても講義する。

その際、民族、国家、南北問題、ジェンダー等といったさまざまな視点から文化について考える。とくに、イスラームの文化の事例も授業のなかで取り上げる。

ジェンダー論 長久手
講師 / 石田好江・藤井麻湖・小川明子

【授業の概要】

ジェンダー(gender)という言葉は、おおよそ「社会的・文化的に形成された性」「社会的規範としての性役割」といった意味で用いられている。ジェンダーという概念を使用することは、単に「性別の捉え方」の問題(生物学的な性別への異議申し立て)にとどまらず、現代社会及びその知のもつ偏りや多様性を認識し、これまでとは違った新しい問題を発見することを可能にする。その意味では、ジェンダーは現代社会の現実をよりよく認識するための道具であるといえる。

本講義では、メディア・コミュニケーション、文化、社会システム等をジェンダーという道具を用いて捉えなおすことを目的としている。

ジェンダー特講Ⅰ・Ⅱ 長久手
講師 / 國信潤子

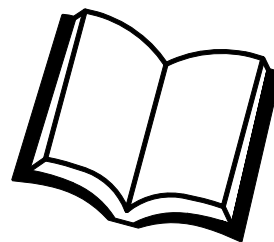
【授業の概要】

産業社会学の領域である。ジェンダー(社会文化的性による格差)に敏感な視点で国内外の男女雇用機会均等の実態、労使関係、正規雇用者と非正規雇用者との格差、家庭的責任を持つ労働者の問題など有償・無償労働の両面について、産業社会学の手法で比較検討する。各種資料、統計データ等から、生活、ビジネス、地域などでの性別役割の実態、さらに経済活動における男女の組織関係、行動様式および意思決定などにおけるジェンダー間異同を検討する。

女性学・男性学 長久手
講師 / 竹信三恵子

【授業の概要】

少子化時代に不可欠といわれるワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の両立)が、戦後の日本社会でなぜ阻害されてきたのかを、新聞記者としての取材の成果を通じて明らかにし、その実現へ向けた方策をさぐる。



愛知淑徳大学エクステンションセンター

これらの講座履修・申し込み先

〒464-8671 名古屋市中千種区桜が丘23 TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)
受付日時(月～金) 9:00～17:00 ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

25号では、就職や仕事に関する二つの定例セミナーの報告を掲載いたしました。自分らしく生きるためにキャリアデザインを描くことの大切さや仕事へのプロ意識など、それぞれの講師の方の臨場感あふれる講演は、学生に深い印象を与えました。

また、研究所初の試みである「ジェンダー視点の卒業論文」報告会では、学生らの活発な意見交換の場となりました。(高橋 博子)

ASU・IGWS2008年度

運営委員

平林美都子(所長兼)、石田好江、
國信潤子、斎藤和志、若松孝司、
西 和久

事務担当

高橋博子